

## 集まれ！キリストの愛のもとに

ルカ福音書 13 : 31-35

みなさん、2022年に韓国イテウォンで起きた雑踏事故のはなしをおぼえてますか？韓国ソウルにあるイテウォンでハロウィーン時期の混雑の中発生した群衆雪崩によって158名の尊いのちが亡くなった痛ましい事故です。ニュースなどを見ると警察の対応が速やかになされていれば起きなかった事故なのではないかといわれていました。何せ現場に集まった人々は我先に目的の場所に行こうと押し合いへし合い、一般の人があしろ、こうしろ、と声を荒げてもみんな聞く耳を持たない。だから権威のある警察官が現場にいて、適切な指示と、交通整理をしていればなんとかなっただろうと言われるわけです。混乱していたり、混沌としていたり、無秩序な状況、状態の場所には権威ある者の適切な指示、命令、舵取りというものは必要になると思います。

大阪に住んでいる人が言っていました、近くに繁華街があるんだけど、週末になると車でごった返して大渋滞になる交差点があるそうです。大阪の人はせっかちの人が多いいと言われていて、我先に進みたいからクラクション鳴らす、気の短い人は窓から顔をだして「はよう行かないかい！」と怒鳴る。

しかしあることが起きると渋滞が緩和されて交通がスムーズになるそうなんです。そのあることとは、交差点に警察官が立つことだそうです。

警察官が交差点に立って、指示を出し始めると渋滞が収まっていく。権威を持った人が傍に居たり、見守ったり、指示を出したりということは、私たちの生活の中では必要なことなんだと思います。

いまこの世界に起きている混乱、混沌、無秩序な状況や状態というのは、人間がこの世界の最高権威者である神の存在を無視し、否定し、背を向けているからじゃないか。人間がこの世界の創造主であり、オーナーであり、いのちの源である神さまのことを、知らない、知らない、関係ないと言う態度をとり続けているからじゃないか。

聖書はそのような人間の姿を罪だと言うんです。そして罪の行く先は死であり、滅びであると聖書はいうんです。神の存在を無視し、否定し、背を向けて、自己中心に生きる人間は自分たちの手で混沌、混乱、無秩序を作り出し、多くの悩み、苦しみ、悲しみをつくり出し

ている。

神は、この世界と私たち人間のことを、それじゃあ勝手にしろ、知らない、知らない、関係ないとは言わなかったし、見捨てなかった。この世界と私たちに関わり続け、呼びかけ続け、支えよう、導こう、救おうとされている。

その、神のこの世界と私たち一人一人に向けられている変わることのない、消えることのない、絶えることのない熱い思いと、限りない無償の愛は、独り子イエス・キリストがこの世界に与えられることではっきりと示されました。

さて、今日の福音書でイエスさまはエルサレムのことで深く嘆いておられます。エルサレムには神殿があり、ユダヤの政治と宗教の中心地です。エルサレムを日本語に直訳すれば「主の平和」となります。しかしエルサレムは、主の平和とはほど遠い、指導者達の腐敗した姿があり、主の平安どころか、恐怖政治による不安と恐れとが人々の心に蔓延していた。イエスさまが特に気にかけて、目をかけ、声をかけ、寄り添い続けた社会的弱者達の苦しみは計り知れないものがあつたでしょう。

イエスさまは人々の痛みや悲しみをご自身のことのように受け止めて、懸命に、その文字通りに命を懸けて神さまの思いと、言葉と、愛とを伝え、生きる力と、勇気と、希望とを与えていきました。イエスさまは、いつでも神さまを指し示し、神さまへと立ち帰るように、悔い改めるように、向き直るように人々を教え、導き、神さまを信じて、神さまのみ言葉に聞き従い、愛し合い生きることへと招きつづけました。そして、今も私たちを招き続けています。

イエスさまがいつものように福音宣教をしていると、ファリサイ派の人々が何人か近寄ってきています「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています」。

ファリサイ派の人々はユダヤの律法に即した正しい宗教的生活を厳格に守ることをしていた人々です。ですからイエスさまが安息日に病の人を癒やしたり、福音宣教の働きをすることを厳しく非難、批判しました。また、罪人たちと関わることは不浄で汚れると考えていたファリサイ派の人々は、イエスさまが罪人達と親しく関わることを強く非難し、批判しました。

そんな彼らファリサイ派の人々が領主ヘロデのイエスさま殺害計画を知り、イエスさまに殺されるからここから立ち去れと警告したのです。

ここで思うのが、警告であったなら、ファリサイ派の人々が警告すべきは、イエスさまではなくヘロデの方だろうということです。

神の律法を守っていることを自負して、律法を守れない、守らない人々を非難し、批判しているなら、「殺してはならない（出エジプト20章13節）」とあの十戒にも記されている律法を守ろうとしない者に対して声を上げること、神さまが与えられた尊いいのちを守ることが律法を遵守するもの達の、そして宗教的指導者達の務め、責務、使命なのではないでしょうか。否、指導者であるとか、指導者でないとか関係なく、神さまから与えられた尊いいのちを守り、大切にすることはすべての人の責務でしょう。

結局のところファリサイ派の人々にとって「律法」は自分にとって都合のいいエゴと欲望を満足させるための道具でしかなかった、と言われても仕方がないでしょう。

イエスさまは尊い、かけがえのない、神が愛してやまないいのちの存在のために声を上げ続け、神さまの限りない無償の愛を人々に示し続け、愛に生きることを呼びかけ続けました。

聖書は言います「愛には恐れがない（1ヨハネ4章18節）」と。その通りにイエスさまはファリサイ派の警告や、ヘロデの脅しに対して一歩も引くことなく、福音を語り続け、神さまのみ心と愛をあらわし続け、前進し続けました。

イエスさまは神さまの思いに、思いを重ねて言われます「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはおまえの子らを何度集めようとしたことか」と。「エルサレム、エルサレム」と我が子のように呼びかけ、神さまの御心に背き続ける姿を嘆き、それでも見捨てることができない神さまの親心ならぬ神心と、深い憐れみと、愛とが示されます。

イエスさまは、神さまの御心を、危険が迫るときに雛鳥たちを本能的に羽の下に集める母親めん鳥の思いにたとえていました。神さまの私たちに向けられている思いは堅固で、揺るぎないものであり、徹底的で、絶対的で、一方的で、圧倒的なものなんだということです。

それはイエスさまの「わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはあり得ないからだ」という言葉にもはっきりとあらわされていると思います。

イエスさまが仰った「進まねばならない道」それは、十字架までの道です。なぜ、どうしてイエスさまは十字架の死までの道を進まなければならないんだ、と仰るのか。それは、どうにかしてでも、なんとかしてでも守りたいいのちがあるから。自分のいのちを差し出して

でも、犠牲にしてでも助けたい、救いたいいのちがあるから。

主イエスは、どんな脅しがあっても、罵りがあっても、嘲りがあっても、裏切りがあっても、「進まねばならない道」と仰った十字架への道を進み行かれました。すべては私たち一人一人の罪のゆるしと滅びからの救いのために。

みなさん一人一人のいのちは、神が独り子イエス・キリストのいのちを差し出してでも守りたいんだ、助けたいんだ、救いたいんだと思わせるほどに価値があり、貴くて、大切な、大切ないのちです。

私たちは、いつでもイエス・キリストのいのちと十字架に示された神の深い憐れみと、限りない無償の愛を思い起こして、与えられたかけがえのないいのちを労り合い、励まし合い、仕え合い、祈り合い生きていくものでありたい。

そして、これからもこのキリストの十字架のもとにとどまり続け、集まり続け、主のみことばから生きる力と勇気、希望をいただきながら、感謝、喜び、賛美をもって生きていきましょう。